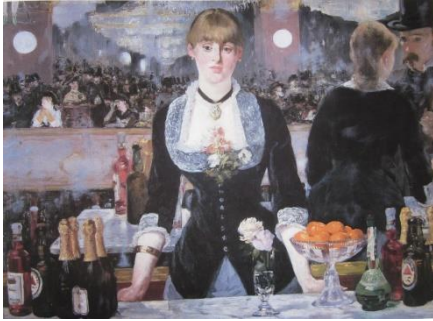


## 「コートールドの印象派」展

東京美術館 2019.09.10～12.15 愛知県美術館・神戸市立博物館を巡回



「コートールド美術館」は、実業家で収集家の「サミュエル・コートールド」が、卓越した審美眼で収集した世界有数の19世紀の魅惑の「印象派・ポスト印象派の西洋絵画作品」を保有していることで名高い。なかでも「セザンヌ」と「ゴッホ」の収集数は英国でも最大規模で、美術館は1931年にロンドンに設立された。

本展は、収集家の情熱溢れる「約60点の作品群」が展示され注目されている。  
エドゥアール・マネ 《フォリー・ベルジェールのバー》1882年 油彩/カンヴァス  
作品は、巨匠が晩年の50歳時に病に侵されながら描いた傑作で、モデルは賑やかなパリのミュージックホールで鏡を背に立つバーのスタッフ女性である。

作品の奥に映る店内からは、ざわめきが聞こえてくるようで、手前にはラベルまでリアルに描かれた酒瓶が並び、モデルの渋黒の衣装とこちらを見つめる瞳がひととき印象的で、やや右にずれた不自然に見える鏡像と相まって多くの議論を呼んできたもので、今回およそ20年ぶりに来日して展示されている。

ピエール・オーギュスト・ルノアール《棧敷席》1874年頃 油彩/カンヴァス  
画伯が「第1回印象派展」に出品した代表作のひとつで、「印象派」という名称が生まれたモネの《印象、日の出》の粗いスケッチとは異なり、かなり入念に描き込まれている。



作品の技法はきわめて変化に富み、しかもよどみないがなくて、その形態は明確な輪郭線を欠いて柔らかく繊細なタッチで描き出されて、モデルの女性の胴衣とそこに付けられた花の出来栄えには特に名人芸が忌憚なく発揮されている。

ポール・セザンヌ 《カード遊びをする人々》1892～96年頃 油彩/カンヴァス



プロヴァンスの農民をモデルとした同じ名前の作品が「5点」描かれているが、何れもタバコをくゆらせてカード遊びに熱中して、顔をうつむけて目の前の勝負に没頭している。作品は、奥行きのない平面的な作品であるが、モデルの二人の上着とズボンの色が逆になっているのは、色使いを押さえて単純に表現しようとした気持ちの表れとされている。